

佐太神社蔵『詞林翹楚』について

——江戸初期松江藩主周辺の和歌事蹟——

山崎 真 克

(比治山大学)

摘 要

佐太神社蔵『詞林翹楚』と河本家稽古有文館蔵などの『山下水』との比較検討を行ったところ、『詞林翹楚』には『山下水』とは異なる収載歌がみられたり、配列が異なったりする場合があり、また『山下水』末尾に付された養法院による跋文・識語・朱印も見出せなかった。『詞林翹楚』に草稿的な要素を認め「原本の可能性」を指摘することも可能だが、現段階では判断の根拠に乏しい。また両者の異同を松平綱隆自身による推敲とみるべきか、養法院などの別人による改訂とみるべきかについても確定しがた
い。

キーワード・佐太神社 松平綱隆 山下水 養法院 松江藩

はじめに

稿者は、出雲松江藩第二代藩主松平綱隆（宝山院）が『古今和歌集』を中心に四十七首の和歌を撰んで構成した私撰集である『山下水』について検討を加えたことがある。¹『国書総目録』（岩波書店）に記載され、『和歌大辞典』（明治書院）では「書陵部蔵の孤本」とされていた

宮内庁書陵部蔵本に加えて、新たに河本家稽古有文館（鳥取県東伯郡琴浦町）蔵本、佐太神社（鳥根県松江市）蔵本を調査した。その結果、新出の二本は、それぞれ元禄十一年（一六九八）十一月、宝永二年（一七〇五）初夏に、いずれも綱隆側室の養法院が書写した真筆資料であることが判明した。また宮内庁書陵部蔵本は、安政二年（一八五五）三月十八日に、鷹司政通・輔熙父子の書写蒐集活動に加わった「源豊泰」によって書写された転写本であった。

今回、『山水』と同内容を持つとされ、「原本の可能性」が指摘されていた佐太神社蔵『詞林翹楚』(松平綱隆筆)を調査する機会を得た。これまで調査した三本の『山水』は、多少の異同がみられるものの、ほぼ同内容であった。しかし『詞林翹楚』は、『山水』とは異なる収載歌がみられたり、配列が異なったりする場合がある。また、『山水』末尾に付された養法院による跋文・識語・朱印も見出せない。本稿では、両者の比較を通して『詞林翹楚』の特徴を明らかにし、「原本の可能性」も含めた位置付けを図ることを目的とする。

一 佐太神社蔵『詞林翹楚』の展示紹介

佐太神社蔵『詞林翹楚』は、平成25年特別展「松江藩主松平家の至宝―天下の名物―」(松江歴史館 平成二十五年十一月)に写真入りで紹介された。これは、平成二十五年十一月十六日〜平成二十六年一月五日に松江歴史館にて開催された同名の特別展の展示図録である。同書には、松平家第十三代当主松平直亮氏による寄進であることを示す寄進状もあわせて写真掲載されている。「記―筆山院 詞林翹楚 一軸―筆養院 古歌仙短冊 一冊/右寄進候也/昭和二年六月/伯爵松平直亮/懸社佐太神社/社務所御中」と記された形式は、昭和初期に松平直亮氏が旧出雲国内の寺社に対し藩主関係の品々を寄進した際のものとは一致する。この時期に寄進されたものには、松平綱隆および養法院の書写による古典籍が多く含まれる。

『詞林翹楚』については、「昭和二年(一九二七)六月に松平直亮なおあきから寄進された宝物。箱には「寶山院様御筆 詞林翹楚」と墨書した紙が貼られている。伊弉諾尊と伊弉冉尊が国づくりをした際に掛け

合った歌に始まり、『古今和歌集』所載の六歌仙などの歌を撰び記したものの。同時に展示している『山水』と内容は同じであり、『山水』の名で写本が多く伝来していることから、『詞林翹楚』が原本の可能性がある。／松平綱隆(宝山院)筆/江戸前期/佐太神社蔵/鹿島歴史民俗資料館寄託」との解説が付されている。この特別展には、千手院(島根県松江市)蔵『山水』(松平綱隆筆)が展示されていたが、現在までに調査が及んでいない。図録掲載の冒頭部分の写真を見る限りでは、養法院筆の河本家稽古文館蔵本・佐太神社蔵本と本文および卷子本の体裁ともにほぼ同じである。

二 佐太神社蔵『詞林翹楚』の書誌

今回の調査に基づき、佐太神社蔵『詞林翹楚』の書誌を記述する。佐太神社蔵『詞林翹楚』は写本一軸、箱入の卷子本である。箱の表に「寶山院様御筆/詞林翹楚」と墨書された貼紙①が存し、その下部分に「佐太神社」と墨書された別種の貼紙②がみられる。

表紙は雀色で桐花文がみられる。金の切箔を散らした深緑色の題簽が貼られ、外題として「詞林翹楚」と墨書されている。見返しには、草花および笹の模様が金泥で描かれた上に、「出雲國主第二代/松平綱隆(寶山院)筆」と墨書される。表紙に続いて楮紙十一枚縫ぎ。無地の表紙以外はすべて布目地であるが、それぞれ料紙の文様や色が異なる。縦二八・六cm、横・五〇・五・九cm(表紙二〇・五cm・桐花文・雀色、第一紙四四・〇cm 菱文(花なし)・白色、第二紙四四・六cm・龜甲草花文・水色、第三紙四四・六cm・草花文・薄青色、第四紙四三・九cm・菊文・山吹色、第五紙四四・六cm・草花文・薄青色、第六紙四四・三cm・草花文・

薄香色、第七紙四四・八cm・渦雲に竜窠文・浅黄色、第八紙四四・五cm・渦雲に竜窠文・水色、第九紙四四・六cm・渦雲に竜窠文・薄香色、第十紙四四・〇cm・草花文・白と金、第十一紙四一・五cm・菱文に花・黄土色)。第一紙に内題「詞林翹楚」とある。和歌は一首二(四行書きだが、一首を上句・下句に分けた二行書きの場合が多い。虫損等は少なく、保存状態は良好である。

『詞林翹楚』の内容検討として、収載された和歌の出典を示し、構成上の特徴を考察する。その際、前稿において整理した『山下水』の構成との比較を行うことで、両者の関係を検討する。左表の「構成」欄には、構成上のまとまりを表す語句を私に記した。

『詞林翹楚』の示す作者名		出典	構成	『山下水』の示す作者名		出典	構成
1	陽神 <small>伊弉諾尊</small>	日本書紀卷第一	和歌の始め	1	男神	日本書紀卷第一	和歌の始め
2	陰神 <small>伊弉聞尊</small>	日本書紀卷第一	和歌の始め	2	女神	日本書紀卷第一	和歌の始め
3	<small>下照姫</small>	日本書紀卷第二	和歌の始め	3	また(したてる媛)	日本書紀卷第二	和歌の始め
4	素戔嗚みこと	日本書紀卷第二	和歌の始め	4	すさのをのみこと	日本書紀卷第二	和歌の始め
5	王仁	古今仮名序	和歌の始め	5	王仁	古今仮名序	和歌の始め
6	うねめ	古今仮名序	歌の父母	6	うねめ	古今仮名序	歌の父母
7		古今仮名序	歌の父母	7		古今仮名序	歌の父母
13	衣通郎姫	古今仮名序(墨滅歌・一一一〇)	小町の流れ	8	《6》	《古今仮名序》	《六義(ひとつ)》
14	文武天皇	古今仮名序(秋下・二八三)	和歌普及の始め	9		古今仮名序	六義(ふたつ)
15	柿本人まろ	古今・秋下・二八四	二聖	10		古今仮名序	六義(みつ)
16	山邊赤人	古今仮名序(万葉・九一九)	二聖	11		古今仮名序	六義(よつ)
17	僧正遍昭	古今仮名序(春上・二七)	六歌仙	12		古今仮名序	六義(いつ、)
18	在原業平朝臣	古今仮名序(恋五・七四七)	六歌仙	13		古今仮名序	六義(むつ)
19	文屋康秀	古今仮名序(秋下・二四九)	六歌仙	14		古今仮名序(秋下・二八三)	和歌普及の始め
20	喜撰法師	古今仮名序(雑下・九八三)	六歌仙	15		古今仮名序(羈旅・四〇九)	二聖
21	小野小町	古今・春下・一一三	六歌仙	16		古今仮名序(万葉・九一九)	二聖
22	大伴黒主	古今仮名序(雑上・八九九)	六歌仙	17		古今仮名序(夏・一六五)	六歌仙
				18		古今仮名序(恋五・七四七)	六歌仙
				19		古今仮名序(春上・八)	六歌仙
				20		古今仮名序(雑下・九八三)	六歌仙
				21		古今仮名序(恋五・七九七)	六歌仙
				22		古今仮名序(墨滅歌・一一一〇)	小町の流れ
						古今仮名序(雑上・八九九)	六歌仙

47	50	38	35	46	45	44	43	42	41	40	39		34	33	32	31	30	29	49	28	27	26	25	24	23	48			
藤原敏行朝臣	すかはらの朝臣	(讀ひとしらす)	(讀ひとしらす)	(讀ひとしらす)	(讀ひとしらす)	讀ひとしらす	二條	吉峯宗貞	よみ人しらす	《きせん》	讀ひとしらす	讀ひとしらす	高向利春	清原ふかやふ	ともり	なりひら	(よみひとしらす)	(よみひとしらす)	よみひとしらす	つらゆき	在原元方	たみね	凡河内躬恒	紀貫之	きの友則	讀人不知			
古今・東歌・一一〇〇	古今・秋下・二七二	古今・恋一・四六九																											
古今卷軸歌	※未詳	恋一巻頭歌																											
47				46	45	44	43	42	41	40	39		38	37	36	35	34	33	32	31	30	29	28	27	26	25	24	23	
藤原敏行朝臣				(よみ人しらす)	(よみ人しらす)	よみ人しらす	二條	良峯宗貞	(よみひとしらす)	(よみひとしらす)	よみひとしらす	《喜せん法師》	(讀ひとしらす)	(讀ひとしらす)	(讀ひとしらす)	讀ひとしらす	ふかやふ	としはる	紀のともり	物名・四三一									
古今・東歌・一一〇〇				古今・雑下・九八九																									
古今卷軸歌				(連統)																									

全体的に前半・後半の二部構成になっている点は、『詞林翹楚』「山下水」の双方とも同じである。冒頭から、和歌の起源を語る『古今和歌集』仮名序の順に基づき、『日本書紀』などにみえる伊奘諾尊(1)・伊奘冉尊(2)・下照姫(3・4)・素戔鳴尊(5)の歌が置かれ、「歌の父母」とされる王仁(6)・采女(7)の歌まで続く。『山下水』ではこの後に仮名序に従って六義の歌(6・8・12)が配されるが、『詞林翹楚』にはこの歌群がみられない。

そして和歌普及の始めとされる「ならの帝」の歌(13)、人麻呂(14)・赤人(15)の「二聖」の歌、遍昭(16)・業平(17)・康秀(18)・喜撰(19)・小町(20)・黒主(22)の「六歌仙」の歌、友則(23)・貫之(24)・躬恒(25)・忠岑(26)の「古今集撰者」の歌と続く前半の構成の大枠は両者とも一致している。ところが、同じ歌であっても配列や作者名表記が異なったり(21・13)、同じ歌人でも別の歌が収載されていたり(14・16・18・20・23・26)、さらには『詞林翹楚』にのみ収載される独自歌があったり(48)するなど、この部分には少なからぬ異同が認められる。

『詞林翹楚』においては、『山下水』で小町歌(20)の後に位置する衣通郎姫歌(21)が采女歌(7)の次にみられる。「小町の流れ」として仮名序古注に記される順に基づくならば、『山下水』の配列のほうが妥当である。また、13番歌の作者を『詞林翹楚』は「文武天皇」とする。「ならの帝」をどの天皇に比定するかについては、聖武天皇説(俊成など)、平城天皇説(顕昭など)、文武天皇説(定家など)など複数の説が存するが、『山下水』ではいずれかの立場を取ることなく仮名序古注の表記とする。そして、人麻呂(14)・遍昭(16)・康秀(18)・小町(20)・友則(23)・忠岑(26)については、『詞林翹楚』と『山

下水』とは異なる歌が収載されている(このうち16・18番歌は、詞書の異同も収載歌の違いに対応している)。この場合は、どちらかが仮名序古注において掲出される歌にあわせて統一しているとは認められない(26番歌の書き入れがみられることから、『詞林翹楚』において躬恒歌(25)および「忠岑」の作者名表記が記されないのは脱落によるとも考えられる)。さらに、六歌仙と古今集撰者の歌の間に、『詞林翹楚』にのみみられる歌がある(48)。「延喜 読人不知」という注記を勘案すれば、「延喜」すなわち撰集下命者である醍醐天皇の歌を、撰者の歌の前に配したとも考えられるが、『古今和歌集』諸本で「よみ人しらず」とある当該歌を醍醐天皇の作とする説は現在までに見出し得ていない。

後半部分でも、27・28番歌の『古今和歌集』巻頭歌と47番歌の巻頭歌にはさまれる形で、おおよそ三群のまとまりが認められるという構成の大枠は一致している。ただし、『詞林翹楚』もしくは『山下水』にのみ収載される歌があったり(49・50)、配列の異なりがあったり(35・38)するなど、この部分にも多少の異同が認められる。

前稿において『山下水』の構成を整理した際には、①29～31番歌・32～34番歌が古今伝授の主要項目の一つである三鳥・三木の歌であり、②35～38番歌が序詞・掛詞の例、③39～46番歌が『古今和歌集』雑下に連続して所収される歌であるとした。『詞林翹楚』には、①歌群の前に「百千鳥」を詠んだ独自歌が存する(49)。古今伝授において「三鳥」がどの鳥を指すかについては複数の説があり、「呼子鳥」(29)「稲負鳥」(30)のほか、「百千鳥」ではなく「都鳥」(31)とする場合もある。『詞林翹楚』には四種の鳥があげられているが、『山下水』では三種となっている。また、『山下水』で②序詞・掛詞の例とした歌群が『詞林

翹楚』にはみられないが、このうち35・38番歌は、次の③雑下の連続歌群の後にそれぞれ「恋巻頭」「恋巻軸」という傍書を伴った形で存する。改めて『詞林翹楚』の傍書に注目すると、遍昭歌(⑩)に「六歌仙」、友則歌(⑫)に「撰者」、古今巻頭歌である27・28番歌に「古巻頭」「今」(二首が「古今和歌集」の巻頭歌であることを示すと思われる)、「百千鳥」(49)に「三鳥秘鳥」、「をがたまの木」(32)に「三種神器」、39番歌に「九首秘哥」、喜撰法師の「わか庵は」歌に「八首秘哥」、古今巻軸歌である47番歌に「一部巻軸」とあるように、書き入れた人物や時期は判然としないものの、歌群のまとまりを示そうとする構成を意識した文言が認められる。また前掲の19番歌(古今・雑下・九八三)を指して「喜せん法師、我いほはの哥は前に見えたり」とする注記は、『山水』では38番歌と39番歌の間にみられるが、39・46番歌が雑下・九八一〜九八九の連続歌群であることを考えれば、『詞林翹楚』のように40番歌と41番歌の間にあつたほうが自然である。ただし『詞林翹楚』のみにみられる50番歌については、この位置に配される必然性が見出せない。

こうしてみてみると、前半はほぼ『古今和歌集』仮名序に基づき、和歌の始めや代表的歌人の歌で構成し、後半は巻頭・巻軸歌を配して『古今和歌集』全体を視野に入れつつ、解釈上留意すべき歌群で構成するという意識は共通している。前半については、『山水』のほうがやや『古今和歌集』仮名序に基づく度合いが高い傾向が認められる。後半については、配列の必然性・理由付けが合理的に解釈できる部分がある。『詞林翹楚』『山水』の双方にみられる。また本稿末尾の『詞林翹楚』の〔翻刻〕および『山水』諸本との【校合結果】に示すように、全体を通して詞書・左注が詳しく記述される場合が多いのは『詞林翹楚』

である(3・4・5・7・13・21・17・40など)。

したがって、松平綱隆撰による両者のうち、『詞林翹楚』に草稿的な要素を多く認めるならば「原本の可能性」を指摘することも可能であるが、現段階では『詞林翹楚』から『山水』への改訂という流れを決定づけるには根拠に乏しいと言わざるを得ない。

おわりに

『詞林翹楚』と『山水』との比較検討を通して、「原本の可能性」を含めた位置付けを図ることを目指したものの、現段階では確定的な見通しを得ることができなかった。調査した三本の『山水』に共通してみられる跋文などは、延宝三年(一六七五)の綱隆没後に養法院が記したものであるから、こちらが最終的な形態であることは確かである。しかし、それ以前の『古今和歌集』からの撰歌部分の異同については、綱隆自身による推敲とみるべきか、養法院などの別人による改訂とみるべきかについても確定しがたい。

今後調査すべきは、松平綱隆筆とされる『山水』(千手院蔵)である。本文の異同、跋文の有無などを確認することで、『詞林翹楚』との関係を考える根拠を見出しうる可能性がある。引き続き江戸初期松江藩主周辺の和歌事蹟についての調査・考察を進めていきたい。

〔注〕

- (1) 拙稿「河本家蔵古有文館蔵『山水』について―江戸初期松江藩主周辺の和歌事蹟―」(『古代中世国文学』22 平成18・6)、同「歌集『山水』をめぐる家と人々」(『アジア遊学』135 『出雲文化圏と東アジア』勉誠出版

(2)『詞林翹楚』とともに寄進状にその名がみられる「古歌仙短冊」については、拙稿「佐太神社蔵『古歌仙』について―第二代松江藩主側室「養法院」の和歌事蹟―」(『山陰研究』3 平成22・12)において翻刻紹介を行った。

〔付記〕本稿は、山陰研究プロジェクト「山陰地域文学関係資料の研究」(二〇一六―一八年度、代表・野本瑠美)による研究成果の一部である。資料の閲覧・複写をご許可下さった佐太神社、鹿島歴史民俗資料館ほか関係各位に厚く御礼申し上げます。

〔翻刻凡例〕

一、翻刻に際しては、底本に忠実であることを心がけたが、製版・印刷上の都合と通読の便宜とを考慮して、次のような方針に従った。

1 底本の変体仮名はすべて現行の字体に改めた。

2 漢字については、できるだけ底本の字体を尊重して、印字可能な範囲

で字体の再現を試みた。したがって、一つの漢字に関して、いわゆる新字体・旧字体の両方を用い、さらには異体字の類も用いた。字体の使い分けを知る便宜のためであるが、原則としてJIS規格に含まれる字体の範囲に限ったので、必ずしも厳密ではない。

3 読み易さを考慮して、読点を施した。また和歌には通し番号を付した。なおこの歌番号は、前稿で河本家蔵古有文館蔵『山下水』の翻刻を行った際に付したものを踏襲するが、『詞林翹楚』における同一歌人の別歌は○数字で示し、独自歌三首には48～50の番号を新たに付した。

4 改行は底本のままとし、紙の継ぎ目を「で示した。ただし、継ぎ目の上に墨書される場合もある。

5 本文に疑問があり、誤字・脱字と考えられる場合は、右傍に(ママ)と注記した。

6 小字または割書で書かれた部分は、読み易さを考慮して、ややポイントを下げた文字で表示した。

〔翻刻〕

詞林翹楚

あひぬ

陰神 伊弉諾尊

2 あなうれしやうましおとこに

あひぬ

喪につとへる人にうたはしむ 下照姫

3 あもなるや おとたなはたの

うなかせる 玉のみすまるの

あな玉はやみ たにふたわたらす

あちすきたかひこね

4 あまさかるひなつめの ゑわたらすせと」

いし川かたふち かたふちに あみ ママ

はりわたし めろよしによし

石川かた測

この二哥はひなふりといふ

出雲の國に宮つくりし給ふ時

に、その所にやいろの雲のた

國の柱をめくりて

陽神 伊弉諾尊

1 あなうれしやうましおとこに

佐太神社蔵『詞林翹楚』について―江戸初期松江藩主周辺の和歌事蹟―(山崎真克)

つを見て

素袞鳴みこと

5 八雲たついつもや重かきつまこめに

やへかきつくるそのやえ垣を

みそもしあまりひともしの初也

おほさ、きのみかとの難波津に

てみこと聞えける時、東宮をた

かひにゆつりて位につきたまはて

三年になりにければ

王仁

6 難波つにさくやこの花冬こもり

いまは春へとさくやこのはな

かつらきのおほきみをみちのお

くへつかはしたりける時、國のつ

かさことおろそかなりとてまう

けなとしたりけれとすさま

しかりければ、かはらけとりて

よめる

うねめ

7 あさか山かけさへみゆる山の井の

あさくはひとをおもふ物かは

又淺きこゝろをわかおもはなく

に、是にておほきみの心と

けにける、此二哥は歌の父母

のやうにてそ手ならふ人の

はしめにもしける

みかとをこひたてまつりて

衣通郎姫

21 我せこか来へきよひなりさ、かにの

くものふるまひかねてしるしも

又くものおこなひこよひしるしも

題しらす 文武天皇

13 龍田川紅葉みたれてなかるめり

わたらはにしき中やたえ南

柿本人まろ

⑭ たつた河紅葉、なかる神なみの

みむろのやまに時雨ふるらし

山邊赤人

15 和哥の浦にしほみちくれはかたを波

あしへをさしてたつ鳴わたる

西大寺のほとりの柳をよめる

僧正遍昭

⑯ あさみとり糸よりかけて白露

を玉にもぬける春のやなきか

五條のきさいの宮のにしのたい

にすみける人ほいにあらて

物いひわたりけるを、む月の

十一日になんほかへかくれにけり、

あり所は聞けれとえ物もい

はて、又の年の春、桜の花さ」

かりに月のおもしろかりける

夜、こそを恋てかのにしのたいに

いきて、つきのかたふくまであ

はらなるいたしきにふせりて

よめる

在原業平朝臣

17 月やあらぬ春や昔の春ならぬ

わか身ひとつはもとのみにして

是貞のみこの家の哥合の哥

文屋康秀

⑰ 吹からに野邊のくさ木のしほるれは

むへやま風をあらしといふらん

喜撰法師

19 わか庵は都のたつみしかそすむ

よをうちやまと人はいふなり

小野小町

⑱ 花の色はうつりにけりないたつらに

わかみ世にふるなかせしまに」

大伴黒主

22 か、み山いさたちよりて見てゆかん

年へぬる身は老やしぬると

題不知 読人不知 延喜

48 龍た河にしきをりかく神無月

しくれのあめをたてぬきにして

きの友則

撰者

②3 うきなからけぬるあわとも成な、ん
なかれてとたに頼れぬ身は

紀貫之

24 結ふ手のしづくににこる山の井の
あかても人にわかれぬるかな

凡河内躬恒

26 有明のつれなくみえし別より
あかつきはかりうきものはなし

た、みね

②6 春きぬと人はいへとも鶯のなかぬかきりはあらしとおもふ

在原元方

27 古 卷頭
としの内に春はきにけりひと
とせをこそとやいはんことしとや

いはむ」

春立ける日よめる

つらゆき

28 今
袖ひちてむすひし水のこほ
れるを春立けふの風や

とくらむ

題しらす よみひとしらす

49 百千鳥さえつる春はものことに

29 あらたまれとも我そふりゆく
遠近のたつきもしらぬ山中に

おほつかなくもよふこ鳥かな

30 我か門にいなおほせ鳥の鳴なへに

けさ吹風にかりは来にけり

むさしの國としもつふさの國と

の中に有角田河のほとりに

いたりて都のいと恋しうお

ほえければ、しはし川のほとりに

おりゐて、思ひやればかき

りなく遠くもきにけるかな

とおもひわひてなかめをる」

に、わたし守はや舟にのれ日

くれぬといひければふねに

のりてわたらんとするに、

みな人物わひしくて京に思

人なくしもあらず、さるお

りにしろき鳥のはしと

あしとあかき川のほとりに

あそひけり、京には見えぬ鳥

成ければみな人みしらす、わ

たし守に是は何とりそと、

ひければ、是なんみやことり

といひけるをき、て讀る

なりひら

31 名にしおは、いさごと、はんど鳥

わかおもふひとはありやなしやと

三種神器
をかたまの木 ともりのり

32 みよし野、吉の、瀧にうかひ出る

あはをかたまのきゆとみつらん」

かはなくさ 清原ふかやふ

33 うはたまの夢になにかはなくさまん

うつ、にたにもあかぬこ、ろを

さかりこけ 高向利春

34 花の色はた、ひとさかりこけれども

かえず、そ露はそめける

39 たいしらす 讀ひとしらす 天輪

いさこ、に我世はへなむすかはらや

ふしみのさとのあれまくもをし

40 我いほはみわの山もとこひしくは

とふらひきませ枕たてるかと

きせん

八首秘歌
わか庵の哥前に見えたり

宇治山の僧きせんはよめる哥

おほくきこえねはかれこれ

をかよはしてよくしらす候

よみ人しらす

41 あれにけり哀いくよのやとなれや

すみけん人のをとつれもせぬ」

ならへまかりける時に、あれ

たる家に女の琴ひきけるを

き、てよみていれたりける

吉峯宗貞

42 侘人の住へきやと、見るなへに

なげきくはゝる琴のねそする

はつせにまうつる道に

ならの京にやとれるとき

よめる

二條

43 人ふるすさとをいとひてこし

かともならの都もうきな成けり

題しらす 讀ひとしらす

44 よの中はいつれかさしてわかならん

ゆきとまるをそ宿とさたむる

45 あふ坂の嵐のかせはさむけれと

行ゑしらねはわひつゝそぬる

46 風のうへにありかさためぬ塵の

みはゆくゑもしらす成にへら也

35 ほとと、す鳴や五月のあやめくさ

あやめもしらぬ恋もする哉

38 なかれては妹背の山の中におつる

吉野のかはのよしやよのなか

吹上のはまのかたにきくう

へたりけるを讀る

すかはらの朝臣

50 秋風の吹あけにたてるしら菊は

はなかあらぬか波のよするか

47 ちはやふる賀茂の社のひめこ

まつよろつ世ふとも色はかはらし

【校合結果】

(詞) : 佐太神社蔵『詞林翹楚』(年次未詳、松平綱隆写)

(稽) : 稽古有文館蔵『山下水』(元禄十一年(一六九八) 養法院写)

(佐) : 佐太神社蔵『山下水』(宝永二年(一七〇五) 養法院写)

(書) : 宮内庁書陵部蔵『山下水』(安政二年(一八五五) 源豊泰写)

※四本間の異同を、歌番号ごとに「詞書」「作者名」「和歌本文」「左注」に分けて示した。四本のうち二本以上で一致がみられる場合は、書写年次の早い本文によって掲出した。なお、漢字・仮名の使い分け、仮名遣いの相違は異同として掲出していない。

をめぐりて(稽・佐・書)

1 作者 陽神 伊弉諾尊(詞)―男神(稽・佐・書)

2 作者 陰神 伊弉聞尊(詞)―女神(稽・佐・書)

3 詞書・作者 喪につとへる人にうたはしむ下照姫(詞)―したてる媛(稽・佐・書)

4 作者 ナシ(詞)―また(稽・佐・書)

4 和歌 ナシ(詞・稽・佐)―頭注「アミ(墨)」(書)

4 和歌 あみ(詞・稽・佐)―網綱(書)

4 和歌 めろよしに(詞・稽・佐)―めろよに(書)

4 左注 この二哥はひなふりといふ(詞)―ナシ(稽・佐・書)

5 詞書 出雲の國に(詞)―すさのをのみこと、女とすみ給はむとて

出雲の國に(稽・佐)―すさのをのみと、女とすみ給はむと

て出雲のくに、(書)

5 詞書 所(詞)―ところ(稽・佐)―前(書)

内題 詞林翹楚(詞)―山下水(稽・佐・書)

1 詞書 國の柱をめぐりて(詞)―ふたはしらのかみくにのみはしら

5 詞書 見て(詞)―見てよめる(稽・佐・書)

5 左注 みそもしあまりひともしの初也(詞)―ナシ(稽・佐・書)

6 詞書 聞えける時(詞)―きこえける時に(稽・佐・書)

6 詞書 三年になりにければ(詞)―三年になりにければ、王仁といふ人のいふかりおもひて讀てたてまつりける(稽・佐・書)

7 詞書 つかはしたりける時(詞)―つかはしたりけるときに(稽・書)

7 詞書 つかはしたりけるに(佐)

7 詞書 かはらけとりて(詞・佐・書)―うねめなりける女のかはらけとりて(稽)

7 詞書 よめる(詞)―よめるなり、これにそおほきみの心とけにける(稽・佐・書)

7 作者 うねめ(本行)(詞・佐・書)―うねめ(行間補入)(稽)

7 左注 又淺きこゝろをわかおもはなくに、是にておほきみの心とけにける、此二哥は歌の父母のやうにてそ手ならふ人のはしめにもしける(詞)―ナシ(稽・佐・書)

8 詞書前 ナシ(詞)―ひとつには／そへうた、おほさゝきのみかとをそへ奉れるなにはつの哥なるへし(稽・佐・書)

8 詞書 ナシ(詞)―ふたつにはかそへ歌(稽・佐・書)

8 和歌 ナシ(詞)―さくはなにおもひつくみのあちきなさ身にいたつきのゐるも知すて(稽・佐・書)

9 詞書 ナシ(詞)―みつにはなすらへうた(稽・佐・書)

9 和歌 ナシ(詞)―君にけさあしたの霜のおきていなはこひしきこにきえやわたらむ(稽・佐・書)

10 詞書 ナシ(詞)―よつにはたとへ哥(稽・佐・書)

10 和歌 ナシ(詞)―我戀はよむともつきしありそ海のはまの真砂は

讀つくすとも(稽・佐・書)

11 詞書 ナシ(詞)―いつゝにはたゝこと歌(稽)―いつゝにたゝこと歌(佐・書)

11 和歌 ナシ(詞)―いつはりのなき世なりせはいかはかり人のことの葉うれしからまし(稽・佐・書)

12 詞書 ナシ(詞)―むつにはいわひうた(稽・佐・書)

12 和歌 ナシ(詞)―このとのほむへもとみけり幸種のみつ葉よつはにとのつくりせり(稽・佐)―こののはむへもとみけりさきくさのみつはよつ葉のとのつくりせり(書)

21 詞書 みかたとをこひたてまつりて(詞)―ナシ(稽・佐・書)

21 作者 衣通郎姫(詞)―ナシ(稽・佐・書)

21 和歌 我せこか来へきよひなりさゝかにのくものふるまひかねてしるしも(詞)―ナシ(稽・佐・書)

21 左注 又くものおこなひこよひしるしも(詞)―ナシ(稽・佐・書)

13 詞書 題しらす(詞)―ナシ(稽・佐・書)

13 作者 文武天皇(詞)―ならのみかと(稽・佐・書)

14 和歌 たつた河紅葉、なかる神なみのみむろのやまに時雨ふるらし(詞)―ほのくくと明石の浦の朝きりにしまかくれ行舟おし

16 詞書 西大寺のほとりの柳をよめる(詞)―ナシ(稽・佐・書)

16 作者 僧正遍昭(詞)―僧正遍昭(稽・佐・書)

16 和歌 あさみとり糸よりかけて白露を玉にもぬける春のやなきか(詞)―はちす葉のにこりにしまぬ心もてなにかは露を玉とあさむく(稽・佐・書)

17 詞書 五條のきさいの宮のにしのたいにすみける人にはあら

て物いひわたりけるを、む月の十一日になんほかへかくれに
けり、あり所は聞かれとえ物もいはて、又の年の春、桜の花
さかりに月のおもしろかりける夜、こそを恋てかのにしのた
いにいきて、つきのかたふくまであはらなるいたしきにふせ
りてよめる(詞)―ナシ(稽・佐・書)

17作者 在原業平朝臣(詞・佐)―在原業平(稽)―業平朝臣(書)

17和歌 月やあらぬ(詞・佐・書)―月やあらん(稽)

18詞書 是真のみこの家の哥合の哥(詞)―二条の後の東宮のみやす
所ときこ^えける時、正月三日おまへにめしておほせ事のある
あいたに、日はてりなから雪のかしらにかゝりけるをよませ
給ひける(稽)―二条の後の東宮のみやす所ときこ^えける時
に、正月三日お前にめしておほせ事のあるあひた^ニ、日はて
りなから雪のかしらにかゝりけるをよませ給ける(佐)―二
条の後の東宮のみやす所ときこ^えける時に、正月三日おまへ
にめしておほせ事のあるあいたに、日はてりなから雪のかし
らにかゝりけるをよませ給ひける(書)

18和歌 吹からに野邊のくさ木のしほるれはむへやま風をあらしとい
ふらん(詞)―春の日のひかりにあたる我なれとかしらの雪
となるそわひしき(稽・佐・書)

19和歌 人はいふなり(詞・稽・書)―人はいふらむ^{なり}(佐)

20作者 小野小町(詞・稽・佐)―小町(書)

20和歌 花の色はうつりにけりないたつらにわかみ世にふるなかめせ
しまに(詞)―色見えてうつらふものは世中のひとのこゝろ
のはなにそありける(稽・佐・書)

21作者 ナシ(詞)―そとおり媛(稽・佐・書)

21和歌 ナシ(詞)―わかせこかくへきよひなりさ、かにのくものふ
るまひかねてしるしも(稽・佐・書)

48詞書 題不知(詞)―ナシ(稽・佐・書)

48作者 読人不知^{延喜}(詞)―ナシ(稽・佐・書)

48和歌 龍た河にしきをりかく神無月しくれのあめをたてぬきにして
(詞)―ナシ(稽・佐・書)

23作者 撰者 きの友則(詞)―紀友則(稽・佐・書)

23和歌 ②3和歌 うきなからけぬるあわとも成な、んなかれてとたに頼れぬ身
は(詞)―花の香を風のたよりにたくへてそうくひすさそふ
しるへにはやる(稽・佐・書)

24作者 紀貫之(詞・佐)―貫之(稽・書)

25作者 凡河内躬恒(詞・佐・書)―みつね(稽)

25和歌 ナシ(詞)―はるの夜のやみはあやなし梅の花色こそ見えね
かやはかくる、(稽・佐・書)

26作者 ナシ(詞)―忠峯(稽)―壬生忠峯(佐・書)

26作者 た、みね
春きぬと人はいへとも驚のなかぬかきりはあらしとおもふ
(詞)―ナシ(稽・佐・書)

27和歌 ②6和歌 ナシ(詞・佐・書)―春立ける日よめる(稽)

27作者 古 巻頭 在原元方(詞)―元方(稽)―在原元方(佐・書)

28詞書 春立ける日よめる(詞)―ナシ(稽・佐・書)

28作者 今 つらゆき(詞)―つらゆき(稽・佐・書)

28和歌 28和歌 今 つらゆき(詞)―つらゆき(稽・佐・書)
むすひし水のこほれるを(詞・書)―むすひし水のれるを(稽)
―むすひし水のこほれるは(佐)

49詞書 三島磐鳥 題しらす(詞)―ナシ(稽・佐・書)

49作者 よみひとしらす(詞)―ナシ(稽・佐・書)

49 和歌 百千鳥さえつる春はものことにあらたまれとも我そふりゆく

(詞) — ナシ (稽・佐・書)

31 詞書 しもつふさの國との中に (詞・佐・書) — しもつふさの國の中に (稽)

31 詞書 日くれぬ (詞) — 日もくれぬ (稽・佐・書)

31 詞書 ふねにのりて (詞・稽・佐) — 舟にのるとて (書)

31 詞書 わたらんとするに (詞・稽・佐) — わたらんするに (書)

31 詞書 思人なくしもあらず (詞・書) — おもふ人なきにしもあらず (稽) — おもふ人なくにしもあらず (佐)

31 詞書 あしと (詞) — あしの (稽・佐・書)

31 詞書 あそひけり (詞・稽・佐) — あそひけり (書)

31 詞書 是は何とりそと (詞・稽・書) — これはなにそと (佐)

31 作者 なりひら (詞・書) — 業平朝臣 (稽・佐)

32 詞書 三種神器 をかたまの木 (詞) — をかたまの木 (稽・佐・書)

32 和歌 きゆとみつらん (詞・稽・書) — きゆと見ゆ覽 (佐)

33 作者 清原ふかやふ (詞) — ふかやふ (稽・佐・書)

33 和歌 あかぬこゝろを (詞・稽・佐) — あはぬこゝろを (書)

34 作者 高向利春 (詞) — としはる (稽・佐・書)

34 和歌 ひとさかり (詞・佐・書) — ひとさかり (稽)

35 詞書 ナシ (詞) — 題不知 (稽・佐・書)

35 作者 ナシ (詞) — 讀ひとしらす (稽・佐・書)

35 和歌 ナシ (詞) — 郭公なくや五月のあやめくさあやめもしらぬ戀もするかな (稽・佐・書)

36 和歌 ナシ (詞) — 夏虫の身をいたつらになす事もひとつおもひに

よりてなりけり (稽・佐・書)

37 和歌 ナシ (詞) — こひくゝてまれに今夜そ逢坂のゆふつけとりは

なかすもあらなむ (稽・佐・書)

38 和歌 ナシ (詞) — なかれては妹背の山の中におつるよしの、河の

よしやよのなか (稽・佐・書)

38 和歌後 ナシ (詞) — 喜せん法師、わか庵の哥は前に見えたり (稽・

書) — きせん法師、わか庵の哥は前に見えたり (佐)

39 詞書 たいしらす (詞) — ナシ (稽・佐・書)

39 作者 讀ひとしらす 天神 (詞) — よみひとしらす (稽・佐・書)

39 和歌 いさこゝに (詞) — いさこゝに (稽・佐・書)

40 和歌後 きせん (詞) — ナシ (稽・佐・書)

40 和歌後 わか庵の哥前に見えたり (詞) — ナシ (稽・佐・書)

40 和歌後 宇治山の僧きせんはよめる哥おほくきこえねはかれこれを

かよはしてよくしらす候 (詞) — ナシ (稽・佐・書)

41 作者 よみ人しらす (詞) — ナシ (稽・佐・書)

41 和歌 をとつれもせぬ (詞・稽・佐) — おとつれはせぬ (書)

42 和歌 見るなへに (詞・佐・書) — 見るからに (稽)

42 和歌 なげきくはゝる (詞・稽・佐) — なげきとはゝる (書)

43 詞書 やとれるとき (詞) — やとれる時に (稽・佐・書)

43 和歌 さとをいとひて (詞) — さとをいとひて (稽・佐・書)

46 和歌 成にへら也 (詞) — なりぬへら也 (稽・佐・書)

35 和歌 ほとと、す鳴や五月のあやめくさあやめもしらぬ恋もする哉

(詞) — ナシ (稽・佐・書)

38 和歌 なかれては妹背の山の中におつる吉野のかはのよしやよのな

か (詞) — ナシ (稽・佐・書)

50 詞書 吹上のはまのかたにきくうへたりけるを讀る(詞)―ナシ(稽・佐・書)

佐・書)

50 作者 すかはらの朝臣(詞)―ナシ(稽・佐・書)

50 和歌 秋風の吹あけにたてるしら菊ははなからぬか波のよするか

(詞)―ナシ(稽・佐・書)

47 詞書 ナシ(詞)―冬の賀茂のまつりの歌(稽・佐・書)

47 和歌 ちはやふる(詞)―ちはやふる(稽・佐・書)

47 和歌 賀茂の社の(詞・稽・書)―かものかものやしるの(佐)

跋文

すべてナシ(詞)―陽神陰神のうましと唱へ給ふ、是和哥の

始めとも云なるへし、下照姫の言を永ふし、素盞鳥の三十一

字に定給ひしより、出雲の國の守なる人はひとり此道^尊を玩ひ

給ふへき事にこそ、侍從綱隆君また御親にそひまし／＼ける

比より、しきしまの道をたしみ和哥の浦の玉藻をかきあつめ

給ふ、今此一巻は、神歌に始て二聖六哥仙までもらさずしる

し給ひ、山下水と名つけて几上の珍玩となし給ふ、古今の序

の言葉にもとすき給ふなるへし、つらく／＼その餘の意を拾ふ

に、山と水とは仁智の人のこのむところなりと壁のうちより

もとめ出たりし文にもしるされけるとそ、仁者は義理おもく

してうつらさる事山にいたり、智者は事の理滞なく流て水に

にたり、この二品にて国を、さめ民をめぐみ給ふ事、なにか

かくること有ぬへし、人のもとめふせくによしなくおよはす

なから臨書し侍る事、かつはおそれかつはやさしくて硯の海

のかはくまでよしあし原の末の世のそしりをもわきまへす、

つたなき筆を染、是を後序となし侍る者也、時に元禄戊寅年

陽復の月穀旦／養法尼識焉／「養法」〔朱印A〕「換／鵝」〔朱

印B) (稽)

※以降は、(稽) (佐) (書) 三本間の跋文の異同を掲出する。

跋文1 うましと唱へ(稽・書)―うましと鳴へ(佐)

跋文3 言を永ふし(稽)―言を永し(佐)―言葉^尊を永ふし(書)

跋文4 素盞鳥の(稽)―素盞鳥尊の(佐・書)

跋文7 ナシ(稽・佐)―頭注「越前一族松江城／主二代侍從四位

下／兼出羽守源綱隆」〔朱〕(書)

跋文11 此一巻は(稽)―此一巻も(佐・書)

跋文28 よしなく(稽・書)―よしなし(佐)

跋文33 筆を染(稽)―筆を染て(佐・書)

跋文34 時に元禄戊寅年陽復の月穀旦／養法尼識焉／「養法」〔朱印A〕

「換／鵝」〔朱印B) (稽)―寶永^三丁酉初夏／七十五歳書／「養

法」〔朱印A) (換／鵝)〔朱印B) (佐)―時に元禄戊寅年陽

復の月穀旦／(二行空白)／從保実朝臣一覽／此一冊本紙一

卷為便覽豊泰書写／安政二年弥生十八日〔花押〕(書)

A reprinting and explanation of “*Shirinyōso*” in Sada Jinja

YAMAZAKI Masakatsu
(Hijiyama University)

[Abstract]

Shirinyōso in Sada Jinja and Yamashitamizu in Keikoyūbunkan are compared and examined. There is a different waka in Shirinyōso and Yamashitamizu, and arrangement is different in both of them. There are no afterwords by Yōhōin put to an end on a Shirinyōso. Shirinyōso may be the original, it's scarce in a basis of a judgement. It's difficult to fix judged as a polish by Matsudaira Tsunataka or a revision by an another person.

Keyword : Sada Jinja, Matsudaira Tsunataka, Yōhōin, Yamashitamizu, Matsue clan